

拉加本

1. 事業実施の目的

第15回目国際チベット学術会議(International Association for Tibetan Studies, 15th IATS2019)において研究成果を発表

2. 実施場所

フランスのパリ、国立東洋言語文化学院 (INALCO)

3. 実施期日

2019年7月7日(日)～2019年7月14日(日)

4. 成果報告

●事業の概要

報告者は、2019年度総合研究大学院大学地域文化学専攻・比較文化学専攻学生派遣事業の助成を受け、2019年7月7日にフランスの首都、パリで開催された国際チベット学術会議(International Association for Tibetan Studies, IATS)において研究発表を行った。3年おきに開催される同会議は、中国、インド、ネパール、ブータン、パキスタン、モンゴル、ロシアなどのチベット文化圏におけるチベット人の歴史、宗教、政治、経済、言語、社会、文化などの研究発表と、アメリカ、ドイツ、フランス、日本などの国々におけるチベット学の潮流や資料紹介など、多岐にわたる研究発表が行われる総合的な学術会議である。1977年に第1回会議が開催され、今回で15回目になる。

第15回国際チベット学術会議(15th IATS2019 Seminar)は、フランスの国立東洋言語文化学院 (Institut national des langues et civilisations orientales, INALCO)、フランス国立科学センター (CNRS)、フランス高度研究実習院 (EPHE)、フランス極東学院 (EFEO)、東アジア文明研究センター(CRCAO)といったいくつかの研究機関および研究所が協力し、2019年7月7～13日にフランスの首都、パリの東洋言語文化学院で開催された。約30カ国から600人あまりのチベット研究者が参集し、そのうち577人が14の部会場に分かれ、様々な異なる課題(63のパネルセッションと31のペーパーセッション及びラウンドテーブル)で研究発表を行った。

フランスのパリ13区に所在する国立東洋言語文化学院は、世界中の約93カ国及び地域の言語・文化を研究し、教えており、1842年に、チベット語を教える科目が設置され、「世界最古のチベット語を教える大学である」といわれている。

報告者が参加したセッションはPS1 Religious Culture in Tantrist Communities (密教コミュニティにおける宗教文化)であり、「Discussing mixed religious beliefs and their social background: Taking 'Brog ru Bonskor Village, Mangra County, Tsholho TAP, as an example (混淆する宗教実践とその社会背景に関する研究—青海省海南チベット族自治州貴

南県ボンコル村の事例から)」というタイトルで研究発表を行った。本発表では、報告者の調査村を事例として、チベット・アムド地域における混淆する宗教実践とその歴史背景、調査村の伝統的な社会構成などについて、ボンコル村の長老たちに対する聞き取り調査や現地調査などで収集した資料、ボンコル村の数少ない歴史資料に関する文献調査で得られたデータを考察・分析して発表内容を構成した。



写真1 学会の開会式



写真2 報告者のセッション

●学会発表について

第15回国際チベット学術会議で実施した発表要旨の和訳は次の通りである。

題目：混淆する宗教実践とその社会背景に関する研究—青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から

本発表の対象となるボンコル村は、青海省海南チベット族自治州貴南県砂溝郷の黄河河岸に位置する半農半牧の村であり、581世帯の2190人からなる（2019年）。この村は仏教とボン教という二つの宗派に属し、その両者を混淆的に信仰してきた伝統がある。昔の村長やリーダーたちはほとんどがボン教徒であり、昔からボン教徒が多かったため「ボンコル」（Bon skor）と呼ばれるようになった。さらに、その祖先たちは裏山で祀る山神に対して「千人のボン教徒と百人の仏教徒の守護神」として仕え、今まで共同で崇拝してきた。

ボンコル村には伝統的にボンポ（bon po）、アリック（a rig）、タルシュル（thar shul）という3つの伝統的社会集団ツォワがあり、それが分裂して現在18のツォワになっている。ある伝説よれば、アリックとタルシュルはチベット人のツォワではなく、モンゴルのアッロルとタタルというツォワを起源とするという。ボンコル村の祖先のボンポ・ツェワオとククウェル千戸とのチュ・ユン（mchod yo、説法師と施主）関係によって、ククウェル千戸の支配下にあったアッロルとタタルのツォワから、それぞれ一戸ずつを、ククウェル千戸の師ボンポ・ツェワオ（ボンコル村の初代村長）のウマ、ラクダ、ヒツジなどの財産管理や召し使いなどのために「下部」として差し上げたという。それ故、村人のほとんどは、チベットの一般村と異なりラクダを飼っており、モンゴルのゲルに住んでいた。現在も村内のほとん

んどの地名はモンゴル語がそのまま使われており、廃棄されていたモンゴル形式の堆石塚ラプツェもいくつか存在する。また、周辺の村から「モンゴル族」と呼ばれ、軽い差別を受けてきた。

1976年、ボンコル村付近に龍羊峽ダムが建設され、当村は二回の移住を経験し、他地域のボン教徒との物理的な距離が離れた。また、名高い仏教徒の学僧などの説法によって村人のほとんどは仏教化し、現在は村内のボン教堂といくつかの家庭で定期的にボン教に関する行事や儀礼を行うぐらいである。当村の知識人と仏教寺院の僧侶の中には、「ボンコル」という村名を使わず、「オムコル」(Om skor)や「ドンコル」(brong skor)と呼び、仏教に関連する村名に変えようとする傾向も見られる。

筆者は、文化人類学の手法を用い、ボンコル村の長老たちに対する聞き取り調査や現地調査などで収集した資料、ボンコル村の数少ない歴史資料に関する文献調査で得られたデータを考察・分析し、本発表では当村のボン教と仏教が混淆する宗教実践とその社会的背景を明らかにした。

●本事業の実施によって得られた成果

第15回国際チベット学術会議では、チベット仏教とボン教の研究者らとの質疑応答を通して議論を深め、ボン教とボン村社会の研究に関心をもつ研究者と知遇を得て、意見交換することができた。例えば、サムテン・ギェンツェン・カルメイ氏、ティ・ヤントルン氏などと直接面談し、チベット・アムド地域のボン教村社会における宗教実践や儀礼などに関する研究上の調査態度や注意点などについて、貴重なコメントをいただき、自分のセッション発表後、ディスカッションを行ってさらにアドバイスをもらうなど博士課程研究を一層進展させる意義があった。

本学術会議で研究成果を発表することにより、報告者は本研究の具体的な位置付けをより明確にすることができた。得られた意見や助言を踏まえて、本発表成果を論文にまとめ「総研大文化科学研究」あるいは「比較民俗研究」などに投稿し、博士論文の一つの章として活用する予定である。

●本事業について

国際チベット学術会議は、チベットを研究対象とする人々にとって非常に重要であり、研究成果を国際的に発信することやチベット学界において一流の学者たちと面談できる大変得難い機会である。このたび、総合研究大学院大学の学生海外派遣事業の助成をいただき、本国際会議で成果発表を可能となったこと心から感謝申し上げたい。学生派遣事業の助成は、学生にとって極めて重要かつ有益な事業であるため、今後とも継続されるようお願い申し上げます。誠にありがとうございました。